

RECD PCT/JP 03 SEP 2004

PCT/JPO2/09085

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

06.09.02

10/506573

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office

出願年月日
Date of Application:

2002年 3月 6日

REC'D 01 NOV 2002
WIPO PCT

出願番号
Application Number:

特願2002-061014

[ST.10/C]:

[JP2002-061014]

出願人
Applicant(s):

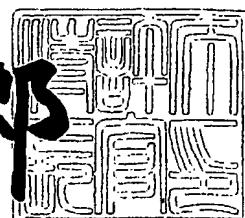
科学技術振興事業団

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2002年10月15日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田信一郎



出証番号 出証特2002-3080145

【書類名】 特許願
【整理番号】 P01-0288
【提出日】 平成14年 3月 6日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 C07C 11/14
【発明者】
【住所又は居所】 神奈川県横浜市南区大岡3-34-49
【氏名】 鈴木 啓介
【発明者】
【住所又は居所】 東京都大田区矢口2-11-19 フォーレスト矢口20
1
【氏名】 松本 隆司
【特許出願人】
【識別番号】 396020800
【氏名又は名称】 科学技術振興事業団
【代理人】
【識別番号】 100092783
【弁理士】
【氏名又は名称】 小林 浩
【電話番号】 03-3273-2611
【選任した代理人】
【識別番号】 100095360
【弁理士】
【氏名又は名称】 片山 英二
【選任した代理人】
【識別番号】 100093676
【弁理士】
【氏名又は名称】 小林 純子

【選任した代理人】

【識別番号】 100112726

【弁理士】

【氏名又は名称】 黒田 薫

【選任した代理人】

【識別番号】 100116850

【弁理士】

【氏名又は名称】 廣瀬 隆行

【選任した代理人】

【識別番号】 100114409

【弁理士】

【氏名又は名称】 古橋 伸茂

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 157061

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

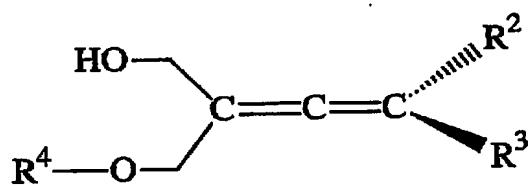
【発明の名称】 光学活性アレンの製造方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】

下記式(1)

【化1】

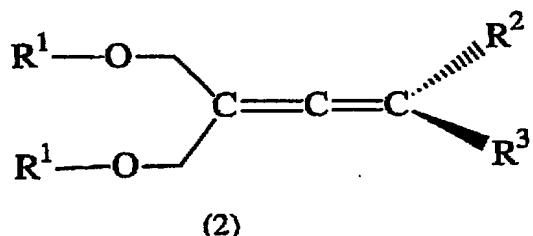


[式中、R²及びR³は、互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₂₀アルキル基又は置換基を有していてもよいC₆～C₂₀アリール基を示し；R⁴はアシル基を示す]

で示される光学活性アレンを製造する方法であって、

酵素触媒の存在下、下記式(2)：

【化2】



[式中、R¹は水素原子又は置換基を有していてもよいアシル基を示し、R²及びR³は上記と同意義を示す]

で示されるアレン誘導体と、R¹が同時に水素原子である場合はR⁴で示されるアシル基を有するアシル化剤と、R¹が同時にR⁴で示されるアシル基である場合は水と、反応させることを特徴とする光学活性アレンを製造する方法。

【請求項2】

前記酵素触媒がリバーゼ酵素またはエステラーゼ酵素である請求項1に記載の

光学活性アレンの製造方法。

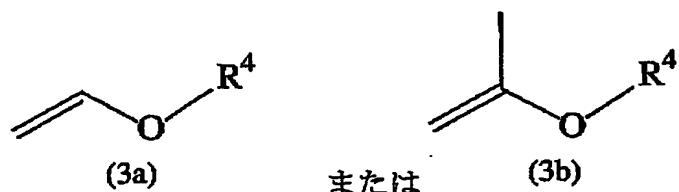
【請求項3】

前記酵素触媒が、カンジダ・アンタークチカ (*Candida Antarctica*) リバーゼ、シュードモナス・フルオレッセンス (*Pseudomonas fluorescens*) リパーゼ、シュードモナス・セパシア (*Pseudomonas cepacia*) リパーゼ、豚臍臓リパーゼ、豚肝臍エステラーゼ及びカンジダ・ルゴサ (*Candida rugosa*) リパーゼからなる群から選ばれる1種以上である請求項2に記載の光学活性アレンの製造方法。

【請求項4】

前記アシル化剤が、

〔化3〕



[式中、R⁴は、アシル基を示す]である請求項1～3のいずれかに記載の光学活性アレンの製造方法。

【請求項5】

R^1 が、水素原子、置換基を有していてもよい $C_1 \sim C_{20}$ アルキルカルボニル基又は置換基を有していてもよい $C_6 \sim C_{20}$ アリールカルボニル基である請求項1～4のいずれかに記載の光学活性アレンの製造方法。

【請求項 6】

R^2 及び R^3 が互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよい $C_1 \sim C_{10}$ アルキル基又は置換基を有していてもよい $C_6 \sim C_{10}$ アリール基である、請求項1～5いずれかに記載の光学活性アレンの製造方法。

【請求項 7】

R²及びR³が互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₄アルキル基又は置換基を有していてもよいC₆～C₈アリール基である、請求項1～6のいずれかに記載の光学活性アレンの製造方法。

【請求項 8】

R^4 がアセチル基、ブチリル基またはベンゾイル基である請求項1～7のいずれかに記載の光学活性アレンの製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、光学活性な軸不斉アレンを製造する方法に関し、より詳しくは、酵素触媒を利用して、対称構造を有するアレン誘導体をエナンチオ選択的に非対称化することによって光学活性アレンを製造する方法に関する。

【0002】

【従来の技術及び発明が解決しようとする課題】

ある化合物が複数の光学異性体として存在し得る場合、ある光学異性体が他の光学異性体に比較して、例えば、医薬または農薬としての高い活性を示すことがある。したがって、特に、医薬・農薬の分野においては、ある特定の光学異性体を合成することを可能とする不斉合成が重要である。また、軸不斉を持つ光学活性アレンは、様々な光学活性化合物の合成中間体として有用である。

従来、リバーゼ等の酵素触媒を用いたラセミ体アレンの光学分割法は知られている（例えば、G. Gil et al. 「Lipase-Catalyzed Ester Formation in Organic Solvents. Partial Resolution of Primary Allenic Alcohols」, Tetrahedron Letters, Vol.28, No.15, pp1647-1648, 1987参照）。

しかしながら、ラセミ体アレンの光学分割法は幾らか知られているものの、種々の置換基を有するアレン化合物をエナンチオ選択的に合成することは知られていない。

【0003】

従って、様々な軸不斉アレンを光学純度良く、簡便に得る合成方法が望まれていた。

【0004】

【課題を解決するための手段】

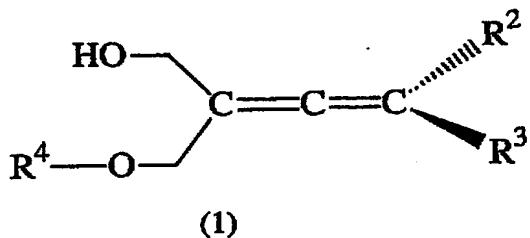
本発明の発明者らは、もっぱらラセミ体アレンの速度論的分割に応用されてきた酵素の軸不斉識別能力に着目し、この酵素を、対称構造を有するアレン誘導体

の非対称化による不斉合成へ応用することによって、様々な軸不斉アレンを光学純度良く、かつ、簡便に得ることができることを見出し、本発明を完成させた。

【0005】

即ち、本発明は、下記式（1）

【化1】

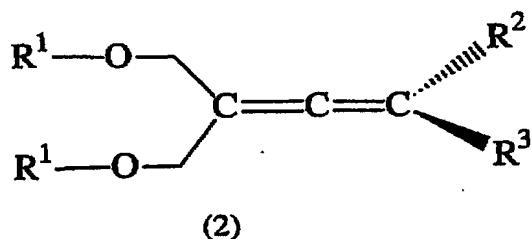


[式中、R²及びR³は、互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₂₀アルキル基又は置換基を有していてもよいC₆～C₂₀アリール基を示し；R⁴はアシル基を示す]

で示される光学活性アレンを製造する方法であって、

酵素触媒の存在下、下記式（2）：

【化2】



[式中、R¹は水素原子又は置換基を有していてもよいアシル基を示し、R²及びR³は上記と同意義を示す]

で示されるアレン誘導体と、R¹が同時に水素原子である場合はR⁴で示されるアシル基を有するアシル化剤と、R¹が同時にR⁴で示されるアシル基である場合は水と、反応させることを特徴とする光学活性アレンを製造する方法を提供する。

【0006】

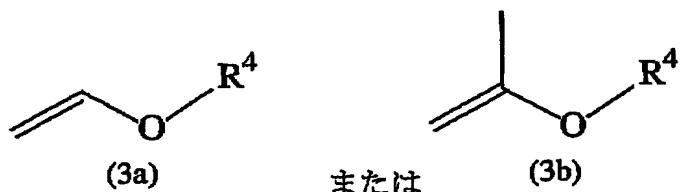
本発明の好ましい態様によれば、前記酵素触媒は、リバーゼ酵素またはエスチラーゼ酵素である。このような酵素触媒として、カンジダ・アンタークチカ（Ca

ndida Antarctica) リバーゼ、シュードモナス・フルオレッセンス (*Pseudomonas fluorescens*) リバーゼ、シュードモナス・セパシア (*Pseudomonas cepacia*) リバーゼ、豚臍臓リバーゼ、豚肝臍エステラーゼ及びカンジダ・ルゴサ (*Candida rugosa*) リバーゼからなる群から選ばれる1種以上が用いられる。

【0007】

本発明で用いられる好ましいアシリ化剤は、これに限定されないが、例えば、下記式(3a)又は(3b)：

【化3】



[式中、R⁴は、アシリ基を示す]で示される化合物である。

ここで、R⁴は、好ましくは、アセチル基、ブチリル基またはベンゾイル基である。

【0008】

本発明において、R¹は、水素原子又はアシリ基、好ましくは、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₂₀アルキルカルボニル基、又は置換基を有していてもよいC₆～C₂₀アリールカルボニル基であり、具体的には、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₁₀アルキルカルボニル基、又は置換基を有していてもよいC₆～C₁₀アリールカルボニル基であり、より具体的には、水素原子又は置換基を有していてもよいC₁～C₄アルキルカルボニル基であり、最も具体的には、水素原子である。

【0009】

R²とR³は、互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₂₀アルキル基又は置換基を有していてもよいC₆～C₂₀アリール基であり、具体的には、水素原子、置換基を有置いてもよいC₁～C₁₀アルキル基又は置換基を有置いてもよいC₆～C₁₀アリール基であり、より具体的には、水素原子、置換基を有置いてもよいC₁～C₄アルキル基または置換基を有置いてもよいC

$C_6 \sim C_8$ アリール基であり、最も具体的には、水素原子、メチル基、エチル基、プロピル基、ブチル基、フェニル基、トリル基又はベンジルオキシメトキシメチル基である。

【0010】

R^2 と R^3 の具体的組み合わせとしては、例えば、水素原子/置換されていてもよい $C_1 \sim C_{10}$ アルキル基、水素原子/置換されていてもよいフェニル基、 $C_1 \sim C_3$ アルキル基/置換されていてもよいフェニル基などが挙げられる。

【0011】

本明細書中、「アルキル基」とは、線状でもよいし、枝分かれしてもよいアルキル基であり、例えば、メチル基、エチル基、プロピル基、n-ブチル基、t-ブチル基、ペンチル基、ヘキシル基などが挙げられる。

「アリール基」としては、例えば、フェニル基、1-ナフチル基または2-ナフチル基などのナフチル基、2-インデニル基などのインデニル基、2-アンスリル基などのアンスリル基、2-トリル基、3-トリル基、4-トリル基などのトリル基、ビフェニル基などが挙げられる。また、「アリールカルボニル基」としては、例えば、ベンゾイル基、1-ナフトイル基、2-ナフトイル基などが挙げられる。

「アシル基」としては、ホルミル基、カルボキシ基、カルバモイル基、置換されていてもよい C_{1-6} アルキルカルボニル基、 C_{1-6} アルコキカルボニル基（例えば、メトキカルボニル基、エトキカルボニル基、プロポキカルボニル基、tert-ブロトキカルボニル基など）、置換基を有していてもよい C_{6-10} アリールカルボニル基、置換基を有していてもよい C_{6-10} アリールオキカルボニル基、置換基を有していてもよい C_{7-16} アラルキルオキカルボニル基、置換基を有していてもよい5～6員複素環カルボニル基、モノ- C_{1-6} アルキルカルバモイル基、ジ- C_{1-6} アルキルカルバモイル基（例、ジメチルカルバモイル基、ジエチルカルバモイル基、エチルメチルカルバモイル基など）などが挙げられる。本発明において好ましく用いられるアシル基は、アセチル基、ブチリル基またはベンゾイル基である。

【0012】

また、アルキル基またはアリール基に置換され得る基としては、例えば、ハロゲン原子（例、フッ素、塩素、臭素、ヨウ素など）、ニトロ基、シアノ基、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルキル基、ハロゲン化されていてもよいC₃₋₆シクロアルキル基、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルコキシ基、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルキルチオ基、ヒドロキシ基、アミノ基、モノ-C₁₋₆アルキルアミノ基（例、メチルアミノ基、エチルアミノ基、プロピルアミノ基、イソプロピルアミノ基、ブチルアミノ基など）、ジ-C₁₋₆アルキルアミノ基（例、ジメチルアミノ基、ジエチルアミノ基、ジプロピルアミノ基、ジブチルアミノ基、エチルメチルアミノ基など）、ホルミル基、カルボキシ基、カルバモイル基、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルキルカルボニル基、C₁₋₆アルコキシカルボニル基（例、メトキシカルボニル基、エトキシカルボニル基、プロポキシカルボニル基、tert-ブトキシカルボニル基など）、モノ-C₁₋₆アルキルカルバモイル基（例、メチルカルバモイル基、エチルカルバモイル基など）、ジ-C₁₋₆アルキルカルバモイル基（例、ジメチルカルバモイル基、ジエチルカルバモイル基、エチルメチルカルバモイル基など）、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルキルスルホニル基、ホルミルアミノ基、ハロゲン化されていてもよいC₁₋₆アルキルカルボキサミド基、C₁₋₆アルコキシカルボキサミド基（例、メトキシカルボキサミド基、エトキシカルボキサミド基、プロポキシカルボキサミド基、ブトキシカルボキサミド基など）、C₁₋₆アルキルスルホニルアミノ基（例、メチルスルホニルアミノ基、エチルスルホニルアミノ基など）、C₁₋₆アルキルカルボニルオキシ基（例、アセトキシ基、プロパノイルオキシ基など）、C₁₋₆アルコキシカルボニルオキシ基（例、メトキシカルボニルオキシ基、エトキシカルボニルオキシ基、プロポキシカルボニルオキシ基、ブトキシカルボニルオキシ基など）、モノ-C₁₋₆アルキルカルバモイルオキシ基（例、メチルカルバモイルオキシ基、エチルカルバモイルオキシ基など）、ジ-C₁₋₆アルキルカルバモイルオキシ基（例、ジメチルカルバモイルオキシ基、ジエチルカルバモイルオキシ基など）、ベンジルオキシ-C₁₋₃アルコキシ基などが挙げられる。これらの置換基が置換される数は特に限定されないが、例えば、これらの置換基は1～5、より具体的には1～3個置換される。

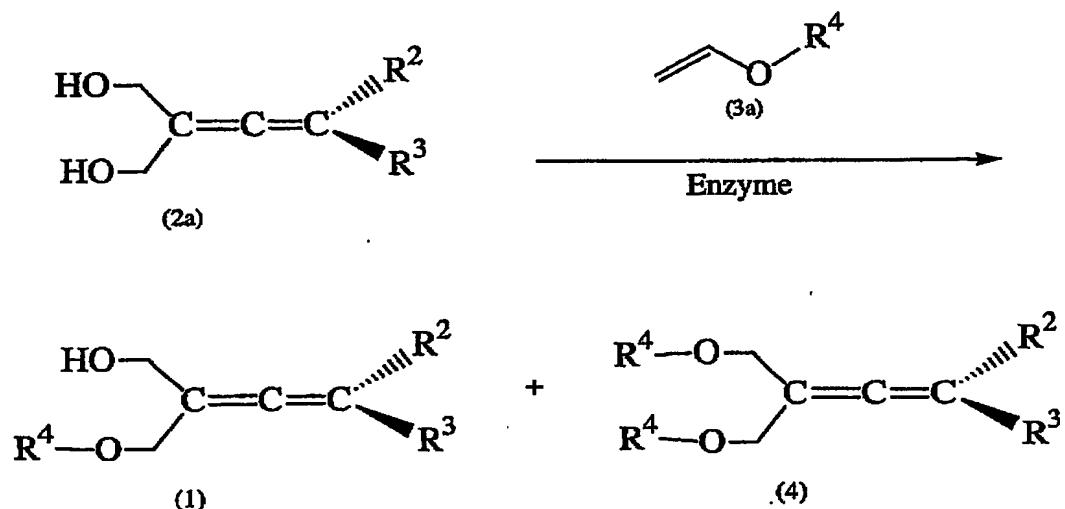
【0013】

以下、本発明の製造方法についてより詳細に説明する。

【0014】

本発明の光学活性アレン化合物は、出発原料として式(2)の化合物においてR¹が同時に水素原子であるものを用いる場合は、例えば、下記スキーム(I)に示す方法によって製造できる。

【化4】

スキーム(I)

[上記式中、式中、R¹、R²、R³及びR⁴は、上記と同意義を示す]

【0015】

上記スキーム(I)において、式(2a)で示されるアレン化合物と式(3a)で示されるアシル化剤（例えば、R⁴がアセチル基、ブチリル基またはベンゾイル基）とを酵素触媒の存在下反応させて、目的化合物である、式(1)で示される光学活性アレン化合物を得る。本発明の好ましい態様によれば、このようにして得られる式(1)で示される光学活性アレン化合物は、高い光学純度で得ることができる。しかし、この際、使用する酵素触媒の種類、使用するアシル化剤の種類、反応条件などに応じて、式(4)で表される化合物も副生成物として生成する場合がある。式(4)で示される副生成物は、各種クロマトグラフィー等公知の分離・精製手段によって分離・除去することができる。本発明の合成法によれば、光学純度の高い光学活性アレン化合物を合成することができる。例えば、

本発明の好ましい態様によれば、光学純度70%以上、より好ましくは80%以上、さらに好ましくは90%以上の光学活性アレン化合物を得ることができる。

【0016】

上記反応は溶媒の存在下あるいは不存在下に行うことができる。反応を溶媒の存在下に行う場合は、通常は、反応に不活性な溶媒が用いられる。本発明において好適に用いられる溶媒としては、例えば、アルコール系溶媒、エーテル系溶媒、ハロゲン化炭化水素系溶媒、芳香族系溶媒、ニトリル系溶媒、アミド系溶媒、ケトン系溶媒、スルホキシド系溶媒などが挙げられる。これらは、二種以上を適宜の割合で混合して用いてもよい。なかでも、ジクロロメタン、クロロホルムなどのハロゲン化炭化水素系溶媒、ジイソプロピルエーテル、テトラヒドロフランなどのエーテル系溶媒、トルエンなどの芳香族系溶媒が好ましい。

【0017】

上記反応で用いられる酵素触媒としては、例えば、カンジダ・アンタークチカ (*Candida Antarctica*) リバーゼ (C A L)、シュードモナス・フルオレッセンス (*Pseudomonas fluorescens*) リバーゼ (P F L)、シュードモナス・セパシア (*Pseudomonas cepacia*) リバーゼ (P C L)、豚臍臍リバーゼ (P P L)、豚肝臍エステラーゼ (P L E) 及びカンジダ・ルゴサ (*Candida rugosa*) リバーゼ (C R L) からなる群から選ばれる1種以上が用いられる。特に好ましく用いられる酵素触媒は、カンジダ・アンタークチカ (*Candida Antarctica*) リバーゼ、シュードモナス・フルオレッセンス (*Pseudomonas fluorescens*) リバーゼ及びシュードモナス・セパシア (*Pseudomonas cepacia*) リバーゼである。

【0018】

この反応は、使用する酵素触媒の種類などに応じて適宜反応条件を選択して行うが、例えば、5°C～40°C、好ましくは、20°C～40°Cの温度で、10分～14日、好ましくは、10分～10日、より好ましくは、1時間～6日、より好ましくは、2時間～10時間行われる。この反応は通常常圧で行われるが、必要に応じて、酵素の触媒能に影響を与えない範囲で減圧下または加圧下で行うことができる。

次に、出発原料として式(2)の化合物においてR¹が同時にアシル基である

ものを用いる場合は、上記酵素触媒の存在下、式(2)の化合物と水を反応させる、すなわち、加水分解することによって、式(1)の光学活性アレン化合物を得ることができる。この加水分解は、使用する酵素触媒の種類などに応じて適宜反応条件を選択して行うが、例えば、5℃～40℃、好ましくは、20℃～40℃の温度で、10分～14日、好ましくは、10分～10日、より好ましくは、1時間～6日、より好ましくは、2時間～10時間行われる。この反応は通常常圧で行われるが、必要に応じて、酵素の触媒能に影響を与えない範囲で減圧下または加圧下で行うことができる。

【0019】

このようにして得られる光学活性アレン化合物は、医薬、農薬などの活性化合物を製造するための中間体として用いることができる。

【0020】

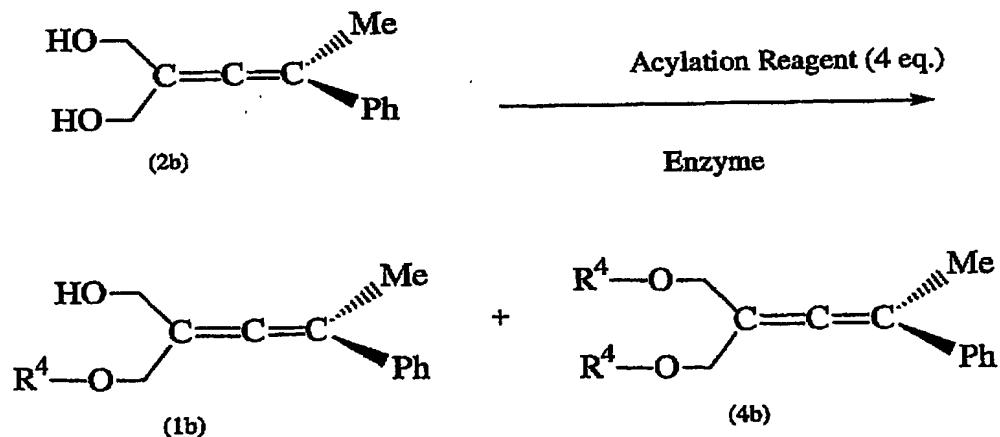
【実施例】

以下、本発明を実施例に基づいて説明する。ただし、本発明は、下記の実施例に制限されるものではない。

【0021】

実施例1

【化5】



【0022】

上記に示す反応において、2-ヒドロキシメチル-4-フェニルペンタ-2,3-ジエン

-1-オール (50.0 mg, 0.263 mmol) に、アシル化剤Aとしてのアセトキシエチレン (0.1 mL) と、酵素触媒としてのシードモナス・フルオレッセンスリパーゼ 25mgを加え、ジイソプロピルエーテル中で混合して反応させた。反応は、攪拌下、30°Cの温度で、1.8時間行った。

【0023】

その後、反応液を酢酸エチルで希釈し、不溶物をろ別した。ろ液を分液漏斗に移し、飽和炭酸水素ナトリウム水溶液、飽和食塩水で順次洗浄した後、無水硫酸ナトリウムで乾燥した。溶媒を減圧留去して得た粗生成物をシリカゲル分取薄層クロマトグラフィー（展開液：ヘキサン／酢酸エチル = 6 / 4）にて精製し、式（1 b）及び式（4 b）の化合物を得た。その結果、目的とする光学活性アレン化合物である式（1 b）の化合物は93%の収率（光学純度90%ee）で得ることができた ($R^4=Ac$)。反応混合物中、式（4 b）の副生成物と式（2 b）で表される化合物の量は、それぞれ約4%と、トレース量であった。以下、得られた化合物の物理化学的性状について測定した結果を示す。

【0024】

式（2 b）の化合物（2-ヒドロキシメチル-4-フェニルペンタ-2,3-ジエン-1-オール）

$^1\text{H-NMR}(\text{CDCl}_3)$ δ 2.14 (s, 3H), 2.36 (brs, 2H), 4.33 (s, 4H), 7.19-7.41 (m, 5H)

元素分析値 ($C_{12}\text{H}_{14}\text{O}_2$ として)

計算値 : C, 75.76; H, 7.42

実験値 : C, 75.47; H, 7.42

【0025】

式（1 b）の化合物（2-ヒドロキシメチル-4-フェニルペンタ-2,3-ジエン-1-イル=アセタート）

$^1\text{H-NMR}(\text{CDCl}_3)$ δ 2.07 (s, 3H), 2.13 (s, 3H), 2.30 (brs, 1H), 4.23 (s, 2H), 4.76 (s, 2H), 7.20-7.40 (m, 5H)

元素分析値 ($C_{14}\text{H}_{16}\text{O}_3$ として)

計算値 : C, 72.39; H, 6.94

実験値: C, 72.43; H, 7.14

【0026】

式(4b)の化合物

$^1\text{H-NMR}(\text{CDCl}_3)$ δ 2.06 (s, 6H), 2.12 (s, 3H), 4.70 (s, 4H), 7.24-7.39 (m, 5H)

【0027】

実施例2~19

酵素の種類と溶媒の種類を変更した(あるいは溶媒を不使用とした)以外は、実施例1と同様の方法で光学活性アレン化合物を合成した。

【0028】

実験条件および結果を、表1に示す。

表1

実施例	酵素	溶媒	アシル化剤	時間	収率(%ee)		
					2b	1b	4b
1	PFL	Pr ₂ O	A	1.8時間	トレース	93(90)	4
2	CAL	なし	A	15分	トレース	38(90)	60
3	PCL	なし	A	1.6日	トレース	91(72)	8
4	PFL	なし	A	1.6日	0	50(94)	50
5	PFL	なし	A	5.2時間	6	92(80)	2
6	PPL	なし	A	3.8日	3	85(86)	9
7	CRL	なし	A	4.9日	23	67(46)	10
8	CAL	Pr ₂ O	A	1.0時間	30	50(58)	20
9	PCL	Pr ₂ O	A	1.1日	トレース	95(88)	4
10	PPL	Pr ₂ O	A	5.8日	47	49(82)	9
11	CAL	CHCl ₃	A	20日	10	73(76)	12
12	PFL	CHCl ₃	A	>7日	39	55(78)	トレース

【0029】

実施例13～30

次に、特定の酵素触媒に対して好適なアシル化剤を選択するために酵素触媒とアシル化剤を変えた以外は、原則として実施例1と同様の方法で光学活性アレン化合物を合成した。なお、BはAcO-C(CH₃)=CH₂、CはBzO-CH₂=CH₂、DはPr-C(=O)-O-CH₂=CH₂を示し、Acはアセチル基、Bzはベンゾイル基、Prはプロピル基を示す。

【0030】

実験条件及び結果を、表2に示す。

表2

実施例	酵素	溶媒	アシル化剤	時間	収率 (% ee)		
					2b	1b	4b
13	PFL	なし	A	5.2時間	6	92(89)	2
14	PFL	なし	B	> 7日	63	37(-)	トレス
15	PFL	なし	D	2.6時間	4	88(96)	5
16	PCL	なし	A	1.6日	トレス	91(72)	8
17	PCL	なし	B	> 7日	69	31(-)	0
18	PCL	なし	D	5.7時間	6	90(-)	4
19	PPL	なし	A	3.8日	3	85(86)	9
20	PPL	なし	B	> 7日	90	10(-)	0
21	PPL	なし	D	18時間	5	92(-)	2
22	PFL	Pr ₂ O	A	3.0時間	トレス	97(92)	5
23	PFL	Pr ₂ O	B	13時間	9	89(92)	トレス
24	PFL	Pr ₂ O	C	3.3日	8	87(92)	0
25	PFL	Pr ₂ O	D	3.0時間	4	84(92)	6

26	PCL	Pr_2O	A	1.1日	トレース	95(89)	4
27	PCL	Pr_2O	B	3.6日	4	94(-)	トレース
28	PCL	Pr_2O	C	> 7日	38	59(86)	0
29	PCL	Pr_2O	D	7.0時間	3	94(86)	3

【0031】

第1～2表に示す結果から明らかなように、本発明の製造方法によれば、目的とする光学活性アレン化合物が高収率で得られることが分かる。

【0032】

【発明の効果】

本発明の光学活性アレンの製造方法によれば、対称構造を有するアレン誘導体をエナンチオ選択的に効率よく光学活性アレンを製造することができる。このようにして製造される光学活性アレンは、医薬・農薬の活性化合物を製造するための中間体として好適に用いることができる。

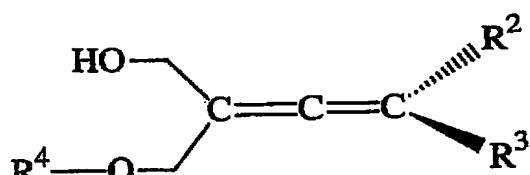
【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 対称構造を有するアレン誘導体からエナンチオ選択的に効率よく光学活性アレンを製造する。

【解決手段】 本発明の課題は、下記式(1)

【化1】

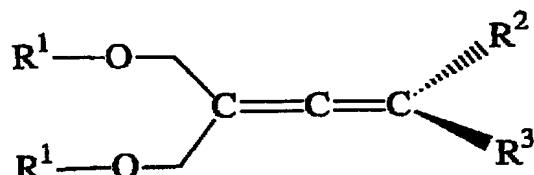


(1)

[式中、R²及びR³は、互いに異なり、水素原子、置換基を有していてもよいC₁～C₂₀アルキル基又は置換基を有していてもよいC₆～C₂₀アリール基を示し；R⁴はアシル基を示す]

で示される光学活性アレンを製造する方法であって、酵素触媒の存在下、下記式(2)：

【化2】



(2)

[式中、R¹は水素原子又は置換基を有していてもよいアシル基を示し、R²及びR³は上記と同意義を示す]

で示されるアレン誘導体と、R¹が同時に水素原子である場合はR⁴で示されるアシル基を有するアシル化剤と、R¹が同時にR⁴で示されるアシル基である場合は水と、反応させることを特徴とする光学活性アレンを製造する方法によって達成される。

【選択図】 なし

出願人履歴情報

識別番号 [396020800]

1. 変更年月日 1998年 2月24日

[変更理由] 名称変更

住 所 埼玉県川口市本町4丁目1番8号

氏 名 科学技術振興事業団